

障がい者スポーツセンターにおける「揺らぎ」に関する質的研究
Qualitative research on “fluctuations” in sports center for persons with
disability

富原拓真 (Takuma Tomihara) スポーツ学研究科 スポーツ情報戦略分野
主査 豊田則成 (指導教員) 副査 林綾子, 北村哲

キーワード: 障がい者スポーツセンター エスノグラフィー 揺らぎ

Key words: Sports center for persons with disability, ethnography,
fluctuations

1. 緒言

東京 2020 パラリンピック競技大会が開催されたことで、障がい者スポーツへの関心が高まっている。令和 3 年に東京都が行ったパラスポーツの関心度に関する調査では、令和 2 年度に比べて、パラスポーツに「関心がある・やや関心がある」と答えた人が 9 ポイント増加している(東京都オリンピック・パラリンピック準備局, 2022)。また以上の回答をした人に、関心を持ったきっかけを聞いたところ、「東京 2020 パラリンピック競技大会を見たから」が 69%と最も高かった。このように東京 2020 パラリンピック競技大会は多くの人たちの障がい者スポーツに対する興味関心を高めるきっかけになったといえる。一方で、関心の多くはパラリンピック等の競技スポーツの面に偏る。そもそも障がい者スポーツは、社会参加を目的とした(1)競技スポーツ、(2)市民スポーツ(生涯スポーツ)、日常生活の自立を目的としたスポーツ、(3)リハビリテーション スポーツ(機能回復訓練の一環として行われる医療的スポーツ)に分けられる(陶山, 2006)。しかし、実際に結城ら(2020)がまとめた文献目録では、障がい者スポーツには、障がい者の社会参加を支持するリハビリスポーツとしての側面と、トップレベルの選手達が競い合う競技スポーツとしての側面が

あるとし、全体を「リハビリ編」と「競技編」に大別しており、市民スポーツ(生涯スポーツ)における研究の蓄積が少ないことを意味している。そこで、本研究では、市民スポーツ(生涯スポーツ)の中心的な役割を担う障がい者スポーツセンター(以下センターと称す)で調査を行い、質的にアプローチすることで、発展継承可能で有益な仮説的知見を導き出し、今後の障がい者スポーツに関する議論に新たな視点を提供することを目的とした。

2. 方法

「障がい者スポーツ指導員はどのように揺らぎを経験しているのか」という RQ に対し、エスノグラフィーによる参与観察及び半構造化インタビューを行い、現場での日常を記録した。尚、本研究者は非常勤の指導員という立場で業務と並行しながら、フィールドワーク(参与観察・インタビュー)を実施した。

1) 対象: A 市の障がい者スポーツセンターで働く指導員

観察調査: 14 名(男性 6 名, 女性 8 名, 22 歳~54 歳)

インタビュー調査: 14 名中, 正規職員 9 名に限定。

2) 調査期間: 20XX 年 6 月+3 年 4 ヶ月

3) 分析方法：修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA)

3. 結果

分析の結果、12個の概念(【概念1 障がい者専用ではダメ】【概念2 来るもの拒まずの精神】【概念3 センターはない方が利用者のためになる】【概念4 センターは必要不可欠】【概念5 利用者と親密になりすぎる】【概念6 友達ではない】【概念7 線引きをして距離感を保つ】【概念8 利用者の望みを最優先する】【概念9 利用者の巣を作る】【概念10 巣ごもりを受け止める】【概念11 利用者に巣立ってほしい】【概念12 巣帰りを受け入れる】)と3個のカテゴリー(《センターのありようを問う》《利用者との関係性を問う》《こころの安全地帯をもたらす》)を生成し、それをもとに概念図を作成した (Fig.1 参照)

4) 考察

「どのように障がい者スポーツ指導員は揺らぎを経験しているのか」というRQに対し、障がい者スポーツ指導員は「センターのあり

ようと利用者との関係性の両面から揺らぎを経験することで、利用者にところの安全地帯をもたらすようになる」というプロセスをたどるといふ仮説的知見を導き出した。以上の仮説的知見を愛着理論(Bowlby, 1969)と比較検討した結果、障がい者スポーツセンターの利用者は、指導員およびセンター(特定の対象)に近接を求め、維持しようとしており、これを指導員自身が作り出そうとしていられる。

5. 引用参考文献

- Bowlby,J(1969) Attachment and Loss Vol.1, Attachment Basic, New York.
 東京都・パラリンピック準備局 (2022) 「都民のスポーツ活動に関する実態調査」
 陶山哲夫(2006) 障害者スポーツの最近の動向 理学療法科学 21 (1) : 99-106.
 結城俊也, 富川理充 (2020) 障害者とスポーツ文献目録：リハビリからパラリンピックまで. 日外アソシエーツ.

RQ：どのように障がい者スポーツ指導員は揺らぎを経験するのか
 分析テーマ：指導員の在り方に揺らくプロセス
 分析焦点者：障がい者スポーツセンターで揺らぎを経験する指導員

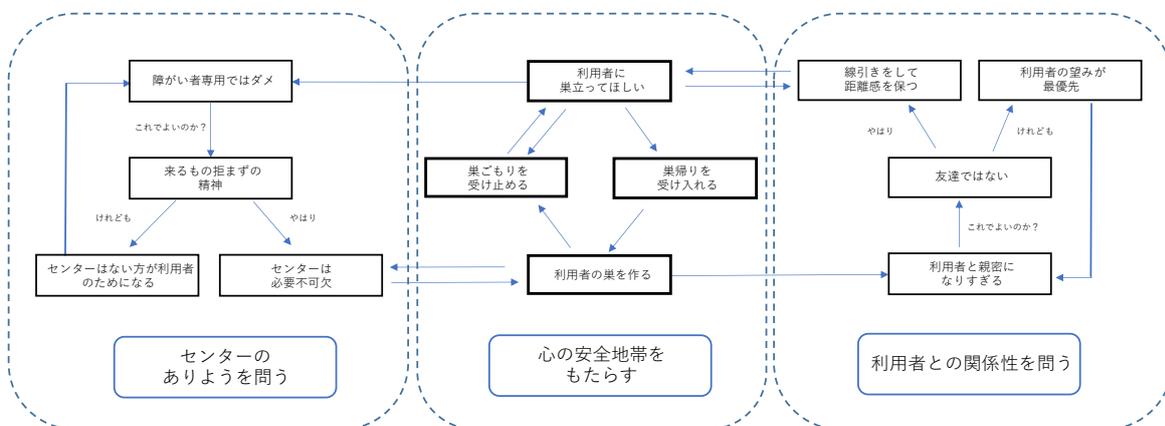


Fig.1 障がい者スポーツ指導員が揺らぎを経験する中で利用者の心理的安全性を形成するプロセス